

Member's Forum

会員投稿の頁



U-35委員会企画

talk baton 01,02 活動報告

talk baton はじめました！

若手プラットフォームづくりの活動の一環として、建築と他分野のコミュニケーショントークイベント「talk baton」をスタートしました。リレーのバトンをつなぐように、テンポよく開催していければと思っています。建築をフィールドとする私たちと毎回のゲストとの対話を通じて、建築が本来持っている多様性やバイタリティを見つめ直し、これからの建築に求められる領域を探っていきます。

U-35委員会Facebookページ

活動内容やメンバーの雑感などぎゅっばらんに情報をアップしています。ぜひ一度お立ち寄りください。

<https://www.facebook.com/U35.aaj>



旅のカナダ人画家が描いたというド派手な巨大鉄扉が今回の会場、ROOTS FACTORYの目印だった。

急な鉄砲階段を3階まで上がる。雑然とした工房の一角が撮影用に設えられ、そこに阪井さんの代表作「MONPEスツール」が無造作に並べられていた。好みのスツールに座ったところでtalk baton01『建築と家具』は静かにスタートした。

■スタンダードを疑う

阪井「子供用の椅子のようだけど、実は大人を意識して作っているんです。高さを決めるのも、雑誌を積んで座ったりして心地よい高さを散々試行錯誤しました。」

このスツールに座ると普段と見える景色が変わり、姿勢も少し前のめりになる。椅子座と床座の中間の高さ。「人間工学ではなく自分自身の心地よさを追求した」という彼の言葉からは、スタンダードを疑ってみることもや実体験から生まれる意外性を楽しむスタンスを感じた。

■自分を追い込む

ROOTS FACTORYのパンフレットは、彼の生き方に対する想いが感じられる。「家具作りたいおっさん」というキャッチコピーが印象的だ。

阪井「パンフに顔を出すとき、ある種の覚悟が必要でした。普通は家具の写真をまず前に出して見てもらうと思うけど、自分が作り出すって表明するのって責任を伴うな、と。」
「つくります」ではなく「つくりたい」想いをストレートに伝え、作り手と使い手が素直に向き合える。ひとりの人としてクライアントと向き合う中で、その人が本当に必要なものが見えてくるのかもしれない。

■使い手と家具の距離感

阪井「古いものが古いだけで良質とは思わないけれど、昔は自分で椅子や机を作っていたから、仕口やディテールは適当だけど生活に合わせた壊れたら自分で直せた。最近の家具は例えばフィニッシュ打ち込んだりでバラす事は考えてないから、結局買い替えるしかない物が多い。」
買うと高いから安くリメイクしたいという方には「新品買ったほうが安いですよ」と言うようにしている、という阪井さん。実際、リメイクの方が手間がかかり高くつくことも多いという。

阪井「それでも思い入れのある家具を愛して使い続けたい、という気持ちに対して全力で応えたいし、その方が楽しいでしょ？」

■建築と家具のサカイ目？

過酷な外部環境（自然）と人間を、隔て・繋げる存在が建築とすれば、家具はそこで過ごす時間を彩るパートナーだろう。

阪井「家具はもっと自由でいいと思う。カラフルに好きな色で、好きな形で。」

より使い手に近い存在である「家具」を内包する建築空間だが、「ユーザー目線の計画」を突き詰めると、家具から発想する建築、というものは成立するのだろうか。

家具職人は自分でデザインして自分で作る道中、「モノ」と向き合い、その奥にある「暮らし」に踏み込んでいく。建築はそんな家具のある暮らしを包む庇護空間だ、とばかりは言っていられないのかもしれない。

talk baton 01 を終えて

「落としどころなしの対話をしよう。」とだけ約束した第1回。最後まで結論のない、ライブ感満載のトークセッションだった。誰が作り誰が使うのか、そんな主語のある関係を大切にしている阪井さんのスタンスは、建築に限らずものづくりの現場でとても大切な前提条件であることを感じた。

対 談 日：2014.11.28

場 所：ROOTS FACTORY
(大阪市浪速区)

モデレーター：廣富 純 (佐藤総合計画)



MONPE スツール



ROOTS FACTORYのパンフレット